

「情報のデジタル化」について考える

いとう まもる <http://mamoru.la.coocan.jp/>

大会の資料係として

2016年の夏の大会では、資料係の森下さんが、「あなたも資料係」という興味深い取り組みをされました。以下、森下さんご自身に解説して頂いたメールを引用させていただきます。

大会が終わると残った資料が結局はゴミ扱いになります。

去年の東京大会でも、以前の水上の大会でもそうでした。

これを捨てるのが忍びない。

〈全国のサークルに送り付けようか?〉とも思ったのですが、勝手に送られても迷惑な話。

それに資料は大会に参加したから入手できるもの、勝手に送るのも変な話。

「作った人が持ち帰って下さい」というアナウンスも聞きますけど、「～部印刷して下さい」と言うから印刷をしたのに、それを持ち帰るのも何か嫌な気持ち。それに帰りの支度は軽くしたい。

また、実行委員内部でのPDF化資料は考えていました。実行委員も忙しくて、(特にサマースクールの担当は)分科会に出られず入手できない資料もある。

そこで、大会の資料袋の中に、「今からあなたも資料係になりませんか?」とチラシを入れた。

仕事は〈残った資料を引き受けること〉。それは地元のサークルで配布してもらえると一番うれしい。

そして、大会資料係として全資料のPDFのDVDも送ってもらえる。(最初はCDの予定だった)DVDを送るにも厚紙が必要だから、紙資料と一緒にだとちょうどよい。

応募人数により、箱でド〜ンと来るか、封筒に納まるか見当がつかないので、送料は着払いにした。

案内チラシは大会期間中の受け付けにしたから、参加者しか応募できない。これを限定にしたので、まあ、許してもらえる範囲だと思っています。

(もっとも電子データだから、コピーはできてしまうけど、まあそれは仕方ない。いちおうそれらしく番号を振ったけど、誰に送ったかは分からない)

今回、送るのに使ったのは手提げ袋でした。去年の東京大会、そして今年も資料仕分けに利用したものです。トコトン利用しました。

大会が終わってから届くお楽しみ袋になった感じです。

今回は14人の協力者がいました。一人当たり3kg弱ぐらいです。今回は1人で仕分けをしたけど、これが20~30人と増えるとなると、協力者が欲しいですね。

この試みに刺激を受けて、「冬の大会では、資料提供者の事前の了解を得て、大会の記録集には資料のPDFデータを添付したらどうか」という提案をしてみました。が、「研究の基本はフェイス・トゥ・フェイス」などの理由から慎重論が強く、少なくとも今回は時期尚早ということで見送りました。

2015年の夏の大会では、資料の事前登録について、グーグル・フォームという、ネット上でデータを集約できるシステムを活用しました。これは、冬の大会では何年か前から採用されていたシステムですが、夏の大会では初めてだったので、若干の心配もありましたが、ホームページ担当の竹田かずきさんのご協力もあり、大きな混乱もなく、さらに従来に比べれば資料係の負担の軽減も出来ました。

そこで、今回の冬の大会では、資料の事前登録だけでなく、大会への参加申し込みについても同じシステムを用い、さらに、ホームページ上に置かれたフォーム経由で申し込むと自動返信メールを送り、受け付け確認するという方法を併用することになりました。しかし、後者については、いくつかのトラブルも起きていて、「フォームからは送信できなかったのでハガキで申し込んだ」「自動返信メールが届かない」などがそれで、フォームに自分自身のアドレスを入力する際、半角で入力すべきところを全角で入力してしまったり、スペルを間違ってしまったら…この辺りは、システム構築を考える際に反省材料だと思っています。

ところで、2015年の夏の大会の時もそうでしたが、学校を退職してしまった先生が大会提出資料を参加者数分印刷するのにどこで印刷するか。大会会場には、印刷機も輪転機も用意してあるので大会会場で用意すればいいわけですが、でも、これって結構あわただしいし、混雑も予想されます。今度の冬の大会では、前日に会場が取れなかったのが、前日準備も出来ないのだからさらにあわただしくなりそうで、実際に、事前にデータを送って頂いて、私の方で必要部数を用意させて頂いたケースもあります。かくいう私も、学校の輪転機とか紙折り機を使える環境は今年度限りなので、他人事とは思えなかったという事情もあります。

また、今年の大会の全体会は、北とびあのドームホールなので、据え置きのプロジェクター経由で資料をホールの壁に映し出すことも可能になりました。紙に印刷したアナログのデータから、パソコンで処理できるデジタルデータへの移行・・・仮説の研究会でも、そんなことが現実的になってきたようにも思います。

事実、研究会の中でも、私を含めて？情報のデジタル化を進めようとしている人たちもいらっしやいます。でも、「年寄りだめだけど、若い人たちのためにはデジタル化は必要だよな」といった問題意識をもっていらっしやる方もいるようにも見受けられますが・・・そういった考え方は、残念ながら私の問題意識とは大きくかけ離れてしまっています。

障害児教育でのICT活用

そこで、以下、私自身の問題意識を少し書かせて頂きたいと思います。私自身がICT活用の研究を始めたのは、肢体不自由児とつきあうようになってからで、障がい者や高齢者のような人こそ、情報をデジタル化することに意味がある。そんな問題意識で、色々取り組んできました。

実は、2015年夏の大会で22年ぶりに板倉さんと直接お話をさせて頂く機会があり、さらに、2016年12月の研究会ニュースの「“板倉先生へのお手紙”の呼びかけ」（竹田かずきさん）に触発されて、私自身のICTの活用履歴のようなものを短い文章にまとめてみました。

拝啓 板倉聖宣 様

いとうまもる です。昨年の夏の大会では失礼しました。思い起こしてみれば、先生と直接お話をさせて頂いたのは、1993年の「障害児教育を根本から考える会」以来のことだと思うので、実に、二十二年ぶりの事でした。仮説実験授業研究会のことは、研究会ニュース・たのしい授業・奈良の山本俊樹さんがおこされたメーリングリスト【メール手”サークル（めーるでさーくる）】などを通じて、常に私の頭の中にはありましたが、目の前で頻発する出来事への対応で精いっぱい、研究会には大変ご無沙汰してしまいました。93年の会以来のことは、年賀状で簡単に報告させて頂いていたとは思いますが、私も今年で退職して5年目、都立学校で授業が出来るのも最後の年になりました。以下、93年の会以来の様子を簡単に報告させて頂ければと思います。

93年の会が終了した年、世田谷にある肢体不自由児対象の養護学校（高等部）に転勤になりました。進行性の障害を持つ生徒さんのケース担当になったという事で、理科の授業で仮説実験授業をしながら、該当の生徒さん及び彼が所属する学習グループを対象に、ICTの活用研究をすすめていきました。当時は、パソコン通信からインターネットへの移行の過度期。異動したその年の夏だったと思いますが、パソコン通信を使った在宅学習支援・・・具体的には、夏休み後に予定されていた文化祭での発表作品のシナリオの相談を、パソコン通信を使ってやりとりしたりしました。その後、その翌年くらいからパソコン通信からインターネットへと移行するわけですが、ちょうどその時期、上述した生徒さんが所属する学習グループに、重い心臓疾患のある生徒さんがいらっしゃいました。手術をすることになり、病院にお見舞いに行った時、お母さんから、「家で何か出来ることはないですかねぇ」との相談を受けたので、「学校がインターネットに接続することになったので、好きなパソコンを使って作品を作ってみたらどうか」との提案をしました。すると・・・長い休み明け、手の込んだ面白い作品を持ってきたので、出来立ての学校のホームページで公開。こうして、「生徒の作品の発表の場としてのホームページ作成」をコンセプトに仕事をすすめました。

こうして3年が経過し、該当の生徒さんたちも卒業。以前から、児童・生徒さんたちの障害も重度重複化してきていたので、担当グループも変更になり・・・色々ありましたが、(^_^ 私が目指してきたものも、ひと段落したと思ったので、異動希望を出したところ（第一希望は、この世界（障害児教育）に入ったときに最初に勉強した視覚障害＝盲学校でしたが）、配属されたのは、家の近くの葛飾区にある、ろう学校（高等部・専攻科）でした。配属されたのは、情報デザイン科。聞いてみると、翌年、ろう学校の職業教育の全国研究会が開かれるので、情報教育に詳しい先生が必要だったとか。ここで、ますますパソコンの世界に引き込まれてしまいました。(^-^;

さらにさらに、異動して四年後には、ろう学校の統廃合で、幼稚部から高等部・専攻科までの総合学園に変身。その環境整備に奔走することになりました。ただ、その条件下で、東京都のICT活用推進校の指定を受け、聴覚障害児への情報保障として、ICTを活用した「見える校内放送」を構築できたのは、よかったと思っています。都合、ろう学校には十年いましたが、一つ所に長くいると、いろいろあります。

そこで異動希望を出したところ、念願の盲学校（中学部）に異動できました。「やっとなんて仮説実験授業ができる」と、山本俊樹さんの【メール手〃サークル（めーるでさーくる）】などに相談しながら、「仮説頼り」の授業を楽しみました。ただ、その一方で・・・なんだかなあ・・・と思うことも多くなり、60歳の定年一年前に勸奨退職し、「授業だけに専念できるかも」という淡い期待を抱いて非常勤教員になりました。配属されたのは、以前勤めていた世田谷区の肢体不自由児対象の特別支援学校（養護学校から名称変更）の教育相談室。介護体験に訪れる大学生さんへの対応と、先生方へのICT活用支援が主な仕事でしたが、ほんの少しだけ仮説実験授業も出来ました。(^▽^)/

都合四年、肢体不自由児対象の特別支援学校で非常勤教員として勤務しましたが、腰痛がどうしてもなく昨年、文京区の盲学校の高等部に異動（「情報」の授業を担当）しました。

そして、その年、はじめて東京で開く夏の大会、資料係が大変そうだという事で、お手伝いさせて頂くことになったわけです。私の中では、「里帰り」という気分でした。(^-^)/

昨年の夏の大会をきっかけに、今年春のフェスティバル・来年の冬の大会の運営のお手伝いをさせて頂いています。今年冬の大会は、福嶋さんの提案で、「授業書まつり」となっています。どんな大会になるか楽しみです。また、機会を見て報告させて頂きます。

いとう まもる 2016.12.25

仮説実験授業研究会だからこそ出来ることは？

思い起こせば、私自身、肢体不自由児と出会うことがなければパソコンを使うことなど思いもよらなかったと思います。そんな時、こんな文章に出会いました。これが、私自身のICT活用の原点だと思っています。

「科学教育というのは<科学のすばらしさ>をおしえることを目標にしている」ということもできると思うんですけど、「科学のすばらしさを教える」というと、僕なんかとは違う考えをもった人が多いので、この際それをはっきりさせておきたいと思うんです。

科学のすばらしさというと、たいていの人は「そう、科学って本当にすばらしい」と賛成します。しかし「科学のすばらしさ」を言う時、たいていの人々が頭にえがいているのは、「誰か頭のいい科学者のすばらしさ」ともう一つは「科学が発見した自然の美しさや、その科学にもとづく技術的発明のすばらしさ」のどちらかです。

でも、それじゃまったく不十分—いや、それだけでは科学というものはスバラシイのかイヤラシイのかわからなくなってしまうと僕は思うんですよ。「その科学が自分のものとなりえた」ということにならないと、「自分にとって科学がすばらしい」とはいえないと思うんですね。

「科学を自分のものとしてできる、そういう<自分自身のすばらしさ>といったものが認められるようにならないと、それは科学のすばらしさとは言えないんじゃないかと思うわけです。そこで仮説実験授業では「科学を自分のものにできた、その自分のすばらしさを教えるために科学を教えよう」としてきたわけです。それが仮説実験授業の科学観、教育観の基礎となっているわけです。

「科学のすばらしさ」といったことは、これまでも重要視した人が沢山いました。また、その科学が明らかにした「自然の美しさ、すばらしさ」をいう人もいました。でも「自分自身のすばらしさをわからせてくれないようなものは科学のすばらしさじゃない」と言ってきた人はほとんどいないんですね。あと特権的な人たちが学歴にも自信のある人は「自分がわかった科学のすばらしさ」を言う人はいるけれど、普通の人でそんなこと言う人ほとんどいない。

でも、そういう風に言わないと、おかしなことになるんですよ。新聞記事なんかで「科学に未来がある」と書けば書くほど、ふつうの人には未来は暗く見えるようになってたりするわけです。だってそうでしょう、科学だけが進んでいくと、おれだけが取り残されていく—そんな感じじゃ、暗くなるのも当然でしょ。オッカナイ未来ですよ。（板倉聖宣「**「自分のすばらしさ」を発見する授業**」『たのしい授業』No. 9より）

世の中の流れは、I o T (Internet of Things :すべてのものがインターネットにつながる) ……そんな声があちこちで聞かれます。仮説実験授業研究会も、そんな流れの中にいます。でも、そんな流れに、ただただ流されるのではなく、情報のデジタル化の本質を見極めつつ、それによる恩恵をより多くの人を受けられるような環境作りに貢献出来るのは、仮説実験授業学派以外にはないと思うのですがどうでしょうか。